

「召天者を覚えて一二人の先生を偲びつつ」

出エジプト記 13章21～22節

キリスト教センター所長、政治経済学部チャプレン 菊地 順

今日の礼拝は、召天者記念礼拝として、天に召された方々を覚えて礼拝が守られています。教会の暦では、毎年 11 月の最初の日曜日に、天に召された方々を覚えて礼拝を守っていますが、聖学院大学でもそれに倣って、それに近い日に、大学の関係者で天に召された方々を覚える礼拝を守っています。

昨年の召天者記念礼拝からこの一年、大学関係者で天に召された方が、キリスト教センターの把握している限りで、4 名おられます。4 名ともすでに退職された方々です。お名前を申し上げますと、児童学科の特任講師であられた深澤悠紀雄先生、欧米文化学科教授であられた西村虔先生、大学院および総合研究所の教授であられた高橋義文先生、学術支援部でお働きくださった桧山さだ子様、以上の 4 名の方々です。天に召されたお一人お一人の上に、またご遺族の上に、主の平安をお祈りいたします。

ところで、今日の礼拝では、この中の特にお二人の先生を偲びながら召天者を覚える礼拝を守りたいと思います。ちなみに、お二人とも、クリスチャンとして、また牧師として歩まれた先生たちです。お一人は、西村虔先生という方です。西村先生は、15 年ほど前にご退職された先生ですが、人文学部の欧米文化学科の学科長などを歴任された先生です。西村先生は 1934 年のお生まれで、聖学院の中学と高校で学ばれた後、アメリカに留学され、ジョージア州の州都アトランタにあるエモリー大学で博士号を取得されました。そして、その後、同じアトランタにあるオグルソープ大学で、宗教哲学の教授として、またチャプレンとして、30 年余りお勤めになりました。聖学院大学は 1988 年に創立されましたが、この年、直ちにこのオグルソープ大学と姉妹校になり、毎年学生たちを語学研修に送り出すことになりましたが、そのためにご尽力くださったのが西村先生でした。その後、西村先生は、オグルソープ大学での仕事を終えられ、1994 年から本学の教授に就任され、先ほど触れたように、欧米文化学科の学科長などを歴任されました。定年退職後は、東京の小岩にある小岩四恩キリスト教会で牧師をされていましたが、今年の 5 月に天に召されました。87 歳のご生涯でした。

学生の皆さんにとっては、かなり年配の先生になりますが、この先生が本学に残してくれたもので、今でも皆さんの身近にあるものがあります。それは、ハンドベルです。今はコロナ禍の中で、なかなか演奏ができませんが、本学のハンドベルは、西村先生がハンドベラー一式を寄付してくださったことから始まっています。それ以後、入学式や卒業式といった式典で、また礼拝で、ハンドベルが演奏されてきました。そして、今では、聖学院大学になくはならない音色となっています。

西村先生については、個人的にはいろいろ思い出がありますが、今日は一つだけお話をさせていたきたいと思います。それは、西村先生は、一言でいえば、非常な国際人であったということです。今

お話ししたように、西村先生は、人生の多くをアメリカで過ごされた方ですが、また日本とアメリカの懸け橋としても活躍されました。特に、オグルソープ大学で教鞭を執られる傍ら、日本の若者をアメリカに送り出す仕事に精力的に取り組まれました。具体的には、アトランタのご自宅に East-West Foundation という私設の団体を組織し、毎年高校を卒業した多くの日本人の若者を受け入れ、英語の訓練を施し、アメリカの各地の大学に送り出すという仕事をされました。そうした活動を精力的に展開した先生でもあったのです。おそらく、その背景には、ご自身が、高校を卒業して単身、大きな夢を抱いてアメリカに渡り、さまざまな苦労を経験されたことがあったのではないかと思います。

西村先生は、小さな自伝を書いています。その中で、今から 67 年前、1954 年に単身アメリカに渡りましたが、その時の思いをイエス・キリストの言葉に託して語っています。それは、イエス・キリストが弟子たちと一緒に船に乗ったとき、弟子たちに、「[さあ、]向こう岸へ渡ろう」(聖書協会共同訳)(*自伝では「いざ彼方に往かん」と文語体で表現。自伝のタイトルも「いざ彼方へ Cross over the storm」となっている)と呼びかけた言葉です。西村先生は、マルコ福音書 4 章 35 節に記されている、イエス・キリストが弟子たちに呼びかけた、「さあ、向こう岸へ渡ろう」との言葉に、深い励ましの声を聞いたのです。そして、その言葉にご自身の人生を委ね、アメリカでの生活を始めたのです。それは、途方もない波乱万丈の人生ともなりましたが、しかし、それはまた、通常的生活では経験することのできない、多くの豊かさに富んだ人生ともなりました。西村先生は、その自伝の最後でこう語っています。「この『生涯』という舞台の上に立ち、脚本通りに自分の台詞を語っている『私』は、あまりにも素晴らしい神様という脚本・演出家によって、そのご恩寵[恵み]の中で演じさせていただいているのです」。西村先生は、イエス・キリストの「さあ、向こう岸へ渡ろう」との呼びかけに全幅の信頼をおいて歩んだとき、自分でも予想していなかったほどの豊かな、恵みに満ちた人生を歩むことになったのです。そして、一人の国際人として、日本とアメリカとの懸け橋ともなったのです。そのダイナミックな人生に、私たちも心を寄せたいと思います。そしてまた、西村先生に倣って、神に信頼しつつ、外に向かって大きく羽ばたいていく人生を目指していきたいと思います。

ところで、次にご紹介するのは、高橋義文先生という方です。高橋先生は、2 年半前まで本学の特任教授をされていたから、多くの人にとっては、まだまだ鮮明に記憶にある先生です。しかし、高橋先生は 1 年余りの闘病生活を経て、この 8 月 29 日に天に召されました。それは、突然の訃報でした。

私自身、高橋先生が闘病生活を送られていたことは存じ上げていましたが、この夏にお亡くなりになるとは夢想だにもしていませんでした。この 4 月に先生からメールをいただいた時には、その最後のところに、「その後、抗がん剤治療を続けています。末期がんの告知を受けてから 1 年がすぎ、徐々に体の重さが増してきました。これまで支えられてきたことに感謝しつつ、あとは神様にお委ねして、と思っています。現在のところ、6、7割の QOL が維持されているのはありがたいことだと思っています」と記されていました。そのため、体調は持ち直しておられるものとばかり思っていました。しかし、78 歳の誕生日を迎えられる少し前の 8 月 29 日に、神は愛する高橋義文先生を天に召されたのです。

高橋先生は 1943 年 9 月に東京にお生まれになり、長じてセブンスデー・アドベンチストの信仰を持たれ、日本三育学院神学校、米国のローマリンダ大学(神学科)、アンドリュース大学大学院(修士課

程)で学ばれました。アンドリュース大学大学院では、ラインホルド・ニーバーという神学者の『人間の本性』という本に基づいて修士論文を書かれ、帰国後は東京神学大学大学院で、聖学院の元理事長であった大木英夫先生の指導の下、ニーバー研究を継続されました。そして1991年に学位論文をまとめられ、それは1993年に『ラインホルド・ニーバーの歴史神学—ニーバー神学の形成背景・諸相・特質の研究』(聖学院大学出版会)として結実しました。

その後、高橋先生は、三育学院短期大学で教鞭をとられ、また学長の重職を務められました。そして2006年から聖学院大学総合研究所で教鞭をとられ、2009年からは大学院教授に、また13年からは研究科長および総合研究所所長に就任されました。その間、学生の指導の傍ら、ニーバー研究に精力的に取り組まれ、また大学院と研究所の発展のためにご尽力されました。その研究成果は『ニーバーとリベラリズム—ラインホルド・ニーバーの神学的視点の探求』(聖学院大学研究叢書 8)(2014年)としてまとめられ、またニーバーの伝記や主著の翻訳においても大いに貢献されました。また、こうしたアカデミックな活動以外でも、一人の牧師として絶えず伝道に心を用いられ、主に学校で伝道に携わる者たちによって作られた「学校伝道研究会」という研究会でも大いに活躍され、その会長も務められました。

高橋先生が研究したラインホルド・ニーバーという神学者は、深い人間理解に基づいて現実の諸問題に取り組んだ現実主義的な神学者であったと言えますが、その姿勢は高橋先生にも引き継がれていたのではないかと思います。いろいろな会で高橋先生と一緒させていただく機会がありましたが、先生はいつも冷静沈着で、感情的になることはなく、しかし深い情熱を秘めた、どちらかという理詰めの人で、堅実に歩みを進められる人であったと思います。先生の最後の研究発表は、たぶんお辞めになる年に行われた総合研究所のラインホルド・ニーバー研究会であったかと思いますが、そのとき先生はアメリカの黒人神学者のジェイムズ・H・コーンの著書『十字架とリンチの木』を取り上げ、そこで展開されているコーンの一方向的なニーバー批判を、一つひとつ丁寧に根拠を示しながら覆いき、それを逆批判していきました。そこには、ニーバーに向けられた不当とも言える批判に対する密かな憤りと、また先生のニーバー愛が、いかに発揮されたご発表であったかと思えます。

高橋先生は、ニーバー研究の二番目の著書『ニーバーとリベラリズム』の「あとがき」の最後で、ニーバーが言及した一つの讃美歌を紹介し、結びの言葉をつづっています。その讃美歌というのは、先ほど賛美した讃美歌288番です。特に、その2節を引用しています。この後、その2節を歌いますが、それはこういう歌詞です。

「ゆくすえ遠く見るを願わじ----ひとあし、またひとあし、道をば示したまえ」

高橋先生は、ニーバーが愛したこの讃美歌を引用しながら、ニーバーが語った言葉を紹介しています。それは、「われわれは将来を予告することができないゆえに、たとえ不確かではあるとしても、希望の持てる最初の一步を踏み出さなければならない-----」。そして、この言葉に対して、高橋先生は、「歴史の現実を踏まえつつ希望を語る——今の時代へのニーバーらしい示唆であるように思われる」と語り、その結びの言葉を閉じています。高橋先生は、ニーバーを、「歴史の現実を踏まえつつ希望を語る」神学者として捉えたのです。そして、そこに、深い共感を覚えておられたのではないかと思います。

ニーバーは 1971 年に 78 歳の生涯を閉じましたが、その晩年に向かう日々も、アメリカは国の内外に大きな問題を抱えていました。外にあっては米ソ冷戦、ベトナム戦争、内にあっては人種問題等がありました。またニーバー自身 60 歳を迎える年に脳梗塞を患い、晩年は不自由な生活を余儀なくされました。しかし、ニーバーはなお、「ゆくすえ遠く見るを願わじ----ひとあし、またひとあし、道をば示したまえ」と祈り、賛美したのです。ニーバーがこの言葉を残した 1963 年という年は、アメリカでは公民権運動のクライマックスともなったワシントン大行進が行われ、マーティン・ルーサー・キング牧師が「わたしには夢がある」と語った年でもありましたが、激動するアメリカ社会を目の当たりにしながら、なおニーバーは神のゆるぎない導きのみ手を仰ぎ見たのです。そして、その神のみ手にアメリカの将来を、また世界の将来を、そして自らの人生を委ねたのです。高橋先生は、それを「歴史の現実を踏まえつつ希望を語る」と捉えました。そして、そこに、いわばニーバーの遺言を聞き取ったのです。しかし、それはまた、高橋先生ご自身の遺言とも言えるのではないかと思います。先ほど紹介したメールの中で、高橋先生は、「これまで支えられてきたことに感謝しつつ、あとは神様にお委ねして、と思っています」と語られていました。現実を深く見据えながら、最後まで神のみ手に委ねる希望に生きられたのではないかと思います。そして、奇しくもニーバーとほぼ同じ年齢で、その生涯を閉じられました。

今日の聖書箇所には、神がイスラエルの民を、奴隷の地エジプトから救出される時、「昼は雲の柱で」、「夜は火の柱で」、その民を導かれたと記されていますが、そのように神は、絶えず私たちを導いてくださるのです。そして、その導きのみ手に委ねることこそが、不確かな人生を歩む私たちにとって、真実の力となり、希望となるのです。そして、この導きのみ手に、西村先生も高橋先生もその人生を委ねられ、その人生を意義ある人生として豊かに歩まれたのです。ここに先生方のご生涯を偲ぶとともに、そのみ跡に私たちも従って行きたいと、改めて強く願うものであります。お祈りをいたします。

2021 年 11 月 10 日 聖学院大学 全学礼拝 召天者記念礼拝